

2013/07/06

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究」(代表：竹内潔) 本年度第1回研究会 京都大学稲盛記念館 213号室

『ギニアの精霊の森のガバナンスをめぐるせめぎあい』

山越 言 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

1. 「外部者の表象により生産される景観」：植民地行政によるアフリカへの「自然」の押しつけ *"Imposing Wilderness"* (Neumann 1998).

- アフリカへの自然保護の押しつけ
 - ・アフリカ植民地分割、ベルリン会議(1878年)。支配→線から面へ、開放形から閉鎖系へ
 - ・植民者である西欧人が強権によりフリーハンドを得てアフリカの自然を創作・構築する
 - ・暗黒大陸、崇高で征服すべきアフリカの自然というイメージと、野生動物がのどかに暮らすエデンの園というイメージの混在 (Adams and McShane, 1992)。いずれにせよ西欧文化に深く根ざした自然観。
 - ・アフリカの地域住民、高貴なる野蛮人→植民地化→近代化→墮落→自然破壊者へ、これらの人々(狩猟者、耕作者)を排除した原生自然保護の実施
 - ・「支配と抵抗」から参加型へ。地域住民の「自然観」は？ (→現在は受益という議論に偏っている)

- ギニア中部、森林-サバンナ境界域における村落周辺林の成立因 (Fairhead & Leach 1996)
 - ・キシドゥグ地域の円環形に村落を取り囲む森林
 - ・フランス人森林官らによる「森を切り尽くした住民が最後の森林パッチを利用するため森の中央に村を創った」という解釈
 - ・村を創立する際に、有用樹を植樹するという語り
 - ・その後、食物残滓、家庭菜園、牛飼育の管理、防火対策により森林が増加
 - ・人口が増えているところで森が増える？
 - ・サバンナの民=牛飼育のための放火による森林破壊者、という政治的言説
 - ・外部者が押しつける「人間活動が森を破壊してきた」という根拠のない言説と、内部者の経験知「人間活動が森を増やしてきた」が鋭く対立

2. 「内部者の実践により構築される景観」：ギニア、ボッソウ村の人とチンパンジー

- ギニア・ボッソウの精霊の森とチンパンジー
 - ・ギニア共和国南東部の森林地域、少数民族マノン(マンデ系言語、話者 30-50万人)
 - ・村の裏山にチンパンジーがひと群れ生息、1960年代より主として生物学的な学術研究の対象に
 - ・日本における里山保全運動との類似性： となりのトトロ→武蔵野の里山、鎮守の森
 - ・人々が飼い慣らしてきた「自然」を内発的に守るというモーメント(vs 原生自然中心主義)

- ボッソウ村落林の円環構造(山越 2009a)
 - ・村落を円環形に取り囲む大木、という構造は、森林サバンナ遷移地域のみでなく、より森林性の強い地域(マノンの村：ダニエ)にもみられた
 - ダニエ → "棘藪(*Acacia pennata*)の村" 敵の攻撃に曝されたとき魔術で一晩で棘藪を築いたという伝説
 - ・ボッソウでは村落を円環状に取り巻く構造はみられない
 - ・しかし富士山型のバン山の頂上を取り巻くように巨木が円形に配置されている ("Strange meadow" : Kortlandt 1986)
 - ・*Acacia pennata* (蔓性木本、幹に棘あり) の存在に注目
 - ・戦時の防衛戦略に地域差? 「要塞構築型」と「避難所型」? ボッソウの村人は、ダニエの戦略はマリンケ由来で、避難所型の方が有効である、と語る
 - ・ニンバにも巨大な避難所? マノン内の多様性を検討する必要
 - ・最近の聞き取り調査により、ボッソウでも「村の創立前は森林ではなく藪だった」「村を創るときに *Iroko* (*Chlorophora excelsa*) を植える」といった語りがあることがわかった
 - しかし、*Iroko* のあるところに村を創る、という語りも
 - 「村を創るときに植樹」という語りはステレオタイプ→本当はどうか
 - ・戦時の防衛という機能は精霊の森の起源を説明する?
- ボッソウ村で起きた村落林の管理権に関わる抵抗運動(山越 2006, Yamakoshi & Leblan 2013)
 - ・IREB (Institute de Recherche Environnementale de Bossou) の設立
 - ・ギニア高等教育省直属、5 部門(霊長類学・遺伝資源・気象学・社会学・文献-情報)
 - ・1999 年より職員の常駐を始め、2001 年 10 月に正式に発足
 - ・研究や観光に関するすべてを管轄下に (ガイドの雇用・個人的援助・観光収入)
 - ・2002 年 2 月中旬 (乾期の開始時) より、バンの周辺部の二次林が組織的に開墾
 - ・観光収入の配分に対する不満、研究による耕作の禁止に対する反感、「先祖伝来の権利、生活のためやむを得ない」
 - ・複数のクランにまたがる 16 「家族」 が関わり、丘の東西南北それぞれに満遍なく
 - ・しばしばチンパンジー調査での入山が禁じられる
 - ・3 月中旬、入山口に呪薬が置かれる (→実質的に入山できなくなる)
 - ・村出身の国会議員(J-M Dore) の介入、補償金の提示、10 家族は受け取り撤退、しかし 6 家族は受け取り拒否 (これまでチンパンジーの利権から遠ざけられていたグループ)
 - ・7 月、県知事、裁判所の介入、主要メンバーの拘束、「チンパンジーなど撃ち殺してしまえ」
 - ・9 月頃裁判終了、沈静化、しかし数家族は現在まで耕作を継続
 - ・2003 年 2 月、IREB 初代研究所長更迭
 - ・新所長との間で観光収入の配分割合が決定 (村 50、ガイド 35、IREB15)
 - 「自治権」をめぐる抗争
 - ・景観デザインをめぐる争い

- ・ 1998 年のチンパンジーによる人身事故の際の会合
 - ・ 「以前バンの中腹まで畑を作っていた頃はこんなことはなかった。チンパンジーが村の近くまで出てくるのは森に食べ物がないからである。」
 - ・ 「だから昔のように畑を作ろう」
 - ・ 「森の中にたくさん果樹を植えよう。チンパンジーにもっと餌をやろう」
 - ・ 「最近急にチンパンジーが悪くなった訳ではない。何十年に一度くらいはこういうことが起こるものだ。」
 - ・ 「研究者や観光客が来るようになって餌をやるが多くなった。人に馴れさせすぎたのではないか」
 - ・ 2002 年の抵抗運動時にも同様の意見
 - ・ 「畑を作った方がよい」 → 過去の経験に基づいた理想的な保全デザインの提示 → 役人・研究者にとっては「私腹を肥やしたい」（「生活のため」という便法）
 - ・ 森の歴史の変遷、デザインについての認識のずれ
 - ・ 「ベレー帽」か裾野まで森か、裾野まで森になったのは 1976 年以降の 20 数年のこと（→ 過去のスナップ写真・航空写真）
 - ・ 英雄的リーダーの登場
 - ・ 一貫して「在来的認識」を主張し続ける個人（M.T.氏）
 - ・ 1998 年の会合での発言、2002 年の伐採の主導者
 - ・ それ以後も毎年耕作を継続、毎年のように投獄、和解金の受け取り拒否
 - ・ 村内におけるチンパンジーに関連する事柄（研究者への対応など）についての「真正性」の主張（チンパンジーへの強い愛着）
 - ・ 「ローカル」な認識が政治的力を持つことは難しいだろう（絵画化されたイメージ）
 - 現在も M.T.氏の周辺以外は(2002 年を除いて)風見鶏的立場（役人、裁判所という権力者の存在）
 - 常に「正論」として科学的言説に対立するだろう
 - 議論の主流争いとは別に現実には（投獄という犠牲の下に）過去の景観を取り戻しつつある
 - ・ 「科学的」反省からの観察距離・頻度の減少は、村の「現実派」と対立するかも
 - 観光収入と人身被害とのバーター
 - この点では研究者サイドは「在来派」と共闘することに？
 - ・ 科学知と在来知の交渉の後に将来像を築くべき
- その後の経緯
- ・ 村と IREB、研究者との関係は緊張
 - ・ ニンバ山世界自然遺産地域の「コアエリア」にボツソウのバンの森を指定する動き → 抵抗の構え
 - ・ 「エコガード」制度の登場
 - ・ バンの森でのイニシエーション儀礼を巡る争い
 - ・ エボラ出血熱（2014 年 1 月 - ）
 - ・ あいかわらず「森と動物を増やそう」 vs. 「森とチンパンジーはわれわれのもの」

- ・「メコネサンス」的状況？（大貫 2003、山越 2012）

3. 自然保護の「ディズニー化」？

- 自然保護区の人造物性
 - ・ デザインされ、インフラ整備されるもの
 - ・ アフリカ人に欠けているとされ、環境教育によって伝わるとされている「もやもやした」もの → 科学的知識？保全思想？
 - ・ 欧米ではマスメディアを通じて普及？ ターザン、Martin & Osa Johanson、エルザ（藤田 2005）
 - ・ 1920-40 年あたりで「フォトサファリ」への転換？
- 「マクドナルド化」と「ディズニー化」
 - ・ 「マクドナルド化」（リッツァー 1999）：画一化、大量消費、安価
 - ・ 「ディズニー化」（ブライマン 2008）：・テーマ化(Theming)、マスター・ナラティブ、非日常性
 - ・ 動物園の使命の変化（教育・保全・種の保存へ）
 - ・ ディズニー自身の「アニマル・キングダム」テーマ： Animal Conservation
 - ・ テーマパークの東アフリカ式「サファリ化」とアフリカの保護区のテーマパーク化？
 - ・ 参加型保護計画の新自由主義的発展？

- 引用文献

- Adams J. S. & T. O. McShane 1992 *The Myth of Wild Africa: Conservation without Illusion*. University of California Press.
- ブライマン、アラン 2008 『ディズニー化する社会』能登路雅子監訳、森岡洋二訳、明石書店
- Fairhead, J. & Leach, M. 1996. *Misreading the African Landscape*. Cambridge, Cambridge University Press.yoto University.
- 藤田みどり 2005 『アフリカ「発見」－日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店。
- Kortlandt, A. 1986. The use of stone tools by wild-living chimpanzees and earliest hominids. *Journal of Human Evolution* 15: 77-132.
- Neumann, R. P., 1998, *Imposing Wilderness: Struggles over Livelihood and Nature Preservation in Africa*. University of California Press, Berkeley.
- 大貫恵美子 2003. 『ねじ曲げられた桜：美意識と軍国主義』岩波書店。
- リッツァー G 1999 『マクドナルド化する社会』正岡寛司監訳、早稲田大学出版部
- 山越言(2006) 「野生チンパンジーとの共存を支える在来知に基づいた保全モデル－ギニア・ボソウ村における住民運動の事例から－」『環境社会学研究』12：120-135.
- 山越言（2009a）「ギニア南部森林地域における村落林の生態史－ドーナツ状森林の機能と成因」池谷和信編『地球環境史からの問い』岩波書店、東京、pp 208-16.
- 山越言(2012) 「在来知と科学知とが遭遇する場－西アフリカの農村における里の動物としてのチンパンジー保全－」速水洋子、西真如、木村周平編『人間圏の再構築－熱帯社会の潜在力－』京都大学学術出版会、京都、pp.299-312.
- Gen Yamakoshi et Vincent Leblan, 2013 « Conflicts between indigenous and scientific concepts of landscape management for wildlife conservation: human-chimpanzee politics of coexistence at Bossou, Guinea », *Revue de primatologie [En ligne]*, 5 | 2013, document 64, mis en ligne le 30 decembre 2013, Consulté le 25 avril 2014. URL : <http://primatologie.revues.org/1762> ; DOI : 10.4000/primatologie.1762